都市空間はデザインの蓄積でできている(はずなのに……)　西村幸夫

先日、ある国際ワークショップのため、学生たちと一緒にイタリア中部の無名の小さな山岳集落に2週間ほどカンヅメになった。その間、手持ちぶさたもあってその小集落の小道という小道をすべて歩き回ったのだが、そのとき痛感したことがある。舗装や階段、広場はいうに及ばず、窓辺のしつらえから玄関周りの鉢植えまで、あらゆる小道空間がすべて配慮され、デザインされているのだ。もちろんデザインといっても数十年いや数百年の意匠が蓄積されている代物である。その結果、それぞれ個性と趣を持ったかけがえのない都市空間が生み出されている。

さすがだと感じつつ、はて、まちに住むとは本来そういうことなのではないかと思い返した。ある世代が家やその周りのどこかに少し手を入れ、ちょっと見栄えをよくする工夫をしてみる。それは家族のためであり、まちのためでもある。次の世代も同じような貢献を続ける。この積み重ねで通りの風景が少しずつ、より魅力的になっていく。じつは当たり前のことの繰り返しなのではないか。

一方で、日本のまちはなぜそのようなデザインの積み重ねができていないのか。建物にしても、通りのしつらえにしても、モノが加わるにつれてさらに混迷を深めてしまうのはなぜなのか。おそらくは都市空間という時間の場の中にそれぞれのデザインを参加させるという感覚が欠けているからだろう。周りの変化も制御不能で、そのためか周辺への関心が欠落しがちである。往々にして自己完結的で刹那的なデザインになってしまう。

つまり、都市の骨格が不変だという前提がないとデザインを蓄積することもできないのだ。変わらないものを見定め、蓄積のきっかけをつくる仕組みをまちに埋め込むようなデザインこそ今求められている。イタリア山岳集落の急な坂道を歩きながら、つい考え込んでしまった。